

「第20回共生社会を考えるフォーラム」（令和元年8月2日（金）三木市立教育センター）に参加しました。

神戸松蔭女子学院大学 教育学科 金丸彰寿, 谷川弘治

三木市立三木特別支援学校は長年にわたり三木市内の関係機関、団体と共に「共生社会を考えるフォーラム」を開催してきています。20周年を迎える今年、神戸松蔭女子学院大学教育学部特別支援教育グループの私たちを講師としてお招きくださいました。今年は「児童生徒が輝く 交流及び共同学習 - インクルーシブ教育の実現に向けて- 」と題して、次の講演と実践発表が行われました。

<講演>

- 1 「インクルーシブ教育システムにおける交流及び共同学習の方向性：『同じ』と『違う』から『共生』を考える」 金丸 彰寿
- 2 「『共感』『異文化間』コミュニケーションからみた通常学級と特別支援学級の連携共同」 谷川 弘治
<地域校交流, 小・中学部居住地校交流の実践発表>
 - 1 「児童が輝く交流学習をめざして ～ 体育の学習を通じた交流学習」 三木市立志染小学校 藤岡 麻美 先生
 - 2 「居住地校交流の実践発表」 三木市立三木特別支援学校小学部 伊藤 真理子 先生
 - 3 「居住地校交流の実践発表」 三木市立三木特別支援学校中学部 高取 正依 先生

金丸は、今日のインクルーシブ教育システムにおける「交流及び共同学習」の課題として、通常学校と特別支援学校の児童生徒が「ともに尊重し合いながら、協働して生活していく態度」をいかに身につけ、「正しい理解と認識」を深めていくかに注目した研究成果として、以下の報告を行いました。

1970年代から80年代の京都府立盲聾学校北吸分校と舞鶴市立高野小学校の共同教育の中での児童の認識の変化を、「違い」と「同じ」の行き来という視点から捉えた。小学校低学年の共同教育では、お互いを知らないことからくる「違い」の認識から、一緒に遊ぶことができたという意味での「同じ」の認識へと変化していった。中学年から高学年にかけて、障害のある児童は自らの「障害」を否認するなど、「障害」に対する悩み



や葛藤に向き合う時期を経て「自分や友達の願いを言える」ように、障害のない児童は「障害のことをもっと知りたい」と願う時期を経て、「障害はあってもがんばっている」など、障害のある友達の内面に目を向けるようになっていった。「違う」から「同じ」を経て、「違うけれども同じ」という認識をもつことができるようになっていったといえる。長い成長の過程で教師は、「仲良くする」といった価値を押しつけないで、児童の疑問を受け止め、膨らませ、自分たちで答えを見つけていけるように関わっていた。三木特別支援学校における居住地交流等における児童生徒の成長過程もこのような視点で整理していくことができるのではないかと。

谷川は、障害のある子どもの「生活者としての思い」を、肌（身体）感覚をとおした言葉として共有するステップとして、親やその子をよく知る大人による代弁、その子をよく知る友達による代弁、自分で思いを伝える、の3つがあること、成長に連れて新しい質の「思いをことばにすることの難しさ」が加わりがちであること、子どものつながる力に依拠する必要があるが、自立しつつ他者とつながる過程は戸惑いや葛藤を伴うが、その中で人として大切なことに気づいていくことを、事例を通して示しました。



また、子どもたちを見守り、支える多職種間のコミュニケーションの留意点を述べました。

三木市立志染小学校からは地域校交流（特別支援学校と地域校の交流）の実践が報告されました。志染小学校3・4年生と三木特別支援学校は毎年1回、「障害の有無にかかわらず、互いに接し、ともに活動することで、お互いの違いを認め合ったり、友達のがんばりを知ったりする。また、障がいのある児童に対する理解を促進し、ともに生きる社会をつくっていかうとする態度を養う」ことを目的として交流会を継続しています。今年も、三木特別支援学校小学部6名と志染小学校3、4年生21名のそれぞれの学習準備性を踏まえ、なわとびやドッジボールでの交流を企画、事前指導では「どうやってなわとびやドッジボールをするか」、「困っていたらどうするか」を考えて、めあてやルールを決めるなど、企画を練り上げていったそうです。当日は、みんなで考えたルールで楽しく取り組めた、体育館に入れなかった友達のために外で活動を展開するなど臨機応変な対応ができた、振り返り会でお互いの発表を聞き合えたなど、達成感と一体感を得ることができました。

三木特別支援学校からの2つの報告は、小学部、中学部在籍の各1名の居住地校交流の事例発表でした。居住地校交流は年3回実施しているそうです。

小学部のA君は、昨年度、妹が小学校に入学したことをもあり、保護者の思いを受け止めて運動会の徒競走に参加しました。練習にも参加し当日を迎えましたが、雨で1時間遅くなっても落ち着いて参加でき、一番になれず悔し涙を流したそうです。これを受け、今年は3回の交流を予定、1学期に1時間目から4時間目までを普通クラスで、5時間目を特別支援学級で取り組みました。途中、カルタではうまくいかず泣いてしまう場面もあったようですが立ち直ることができ、七夕飾り作りでは友達の行動をみて自分もやってみるなど、自然にかかわり合うことができたということでした。

中学部のBさんは、交流学級での英語と音楽の授業、そして部活への参加にチャレンジしました。英語ではBさんの特性を考慮した教材（ピクチャーカード）を作成したところ、クラス全員に役立つとして取り入れられました。これは授業のユニバーサル化の一つとして注目できます。音楽ではギターにチャレンジしますが、困っていたとき、クラスメイトが自発的に教え始め、弦を押さえることができるようになりました。

交流の中で、障害のある児童生徒は行動の手掛かりを見つけ、上手くいかなくても立ち直り、障害のない児童生徒は、自然とかかわり、助け合う姿が見られるなど、とても暖かい交流の様子を感じることができました。この背景には、長年の交流の積み重ねがあること、障害のある友達への理解を得るために苦手さなどの特性を伝えること、一緒に学習するための工夫を教師間で協議したり、子どもたちと考えるなど、継承されている実践知があり、子どもたちによってさらに深められていくことを大切にしていることをあげることができると思われました。



質疑では、教師の立場から「低学年の子たちは、できることも手を出してしまうが、よい事前指導はないか？」という質問がありました。「できること、できないこと」をわかりやすく説明すること「できることは、自分でしたい」ことへの意識付けは必要だが、子どもたちは成長とともに、友達の力に気づいていくし、子ども同士の教えあいもみられるようになるので、そのプロセスを大切に見守りたい、と伝えました。

保護者の立場からは、三木特別支援学校と小中学校が展開する地域校交流、居住地校交流の取り組みへの支持と期待が寄せられました。地域の日常生活の中で声かけしてくれる友達ができることが嬉しい、居住地校交流があるから三木特別支援学校に入学したなど、これらの活動がすっかり地域に定着していることを物語っています。

「今日のフォーラムに参加して、親として交流内容にもう少し意見を言いたいと思ったが言ってもよいだろうか」という質問に対して、親は地域で子どもを育てるチームの重要な一員であって、何でも言えることが大切と伝えました。子どもさんが居住地校交流に参加してこられたお父様は、訓練の先生に「行動には必ず理由がある」と言われたことがこころに残っていて、これまで父親として頑張ってきたと、親として、子どもの思いを代弁することの大切さを強調されました。

最後に、金丸から、20年間の子どもたちの育ちをまとめていくことが大切と伝えました。

終了後も、しばらく関係の皆様と意見交換の場を得ることができました。

全体を通して、子どもたちを見守る思いの暖かさ、つながりを活かして、思いを具体化していく力強さを感じることができました。そして、共生社会を推進する教師を育てる神戸松蔭女子学院大学教育学部の責任を強く感じる一日となりました。

三木市のみなさま、ありがとうございました。そして、今後ともよろしく願いいたします。

(文責 谷川弘治)